昭和44年度埋蔵文化財緊急調査概報

鞠智城跡

熊本県教育委員会

序

熊本県が鞠智城跡の調査を開始したのは、昭和42年のことである。当時激しい勢いでひろまつていた開田工事によつて、「幻の城跡」と言われていた鞠智城跡はその姿を明らかにすることなく失われるのではないかと思われた。このため、遺跡の記録保存とともに、保存対策に必要な資料の収集を目的として、国庫補助による調査が開始されたのである。

この調査は予期以上に困難な事業であつたにもかかわらず、ここに一応当初の目的を達成し得たのは、調査員各位をはじめ、地元関係者の遺跡に対する深い愛情と絶大な協力があつたからで、ここに衷心から感謝申し上げる次第である。

なお、今回の調査の結果、予想以上に重要な遺構が遺存していることが明らかになつたが、城跡の全貌を明らかにするためには今後更に調査を継続する必要があろう。同時に遺跡の保存については、今後の大きな課題と考えられるので関係者各位の理解と協力をあわせて願うものである。

昭和45年3月

熊本県教育委員会

目　次

Ⅰ　経過概要 …… 2

Ⅱ　長者原礎石群 …… 4

Ⅲ　宮野礎石群 …… 10

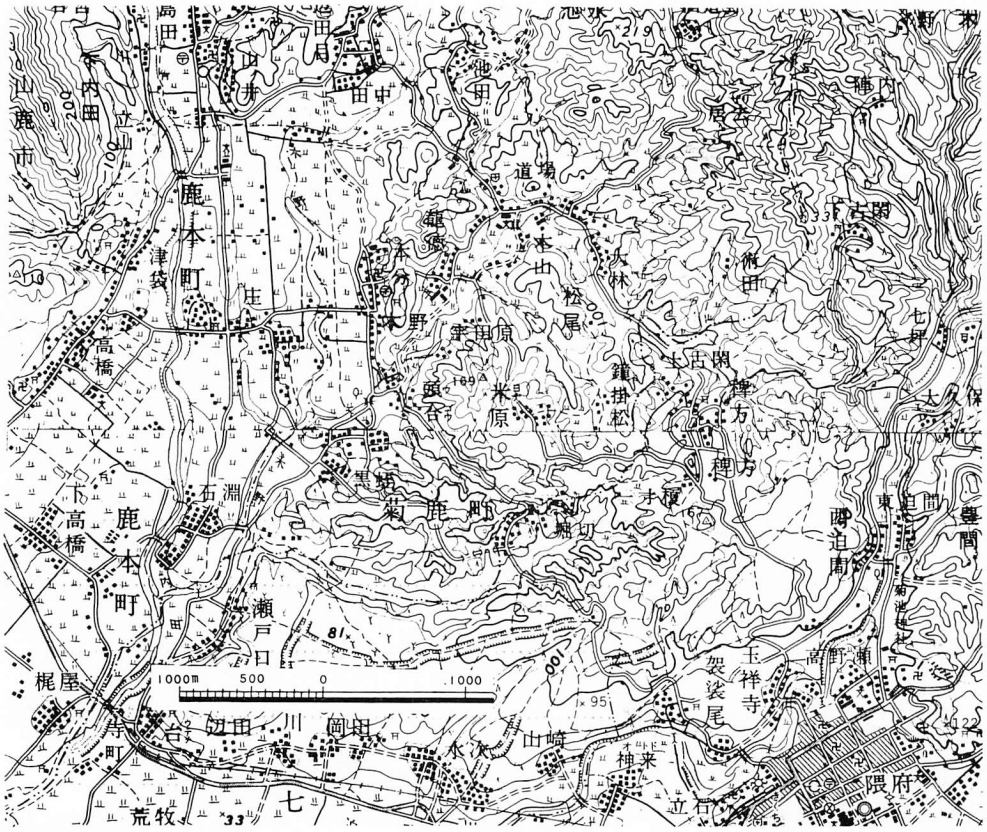
Ⅳ　長者山の遺構 …… 15

Ⅴ　小結 …… 18

Ⅰ 経過概要

鞠智城の調査が企画され、第一次調査に着手したのは昭和42年７月であつた。ついで翌43年３月には第一次調査時に実施できなかつた分の補足調査を行ない、同年８月には第二次調査を行なつた。ここに従来「幻の城」といわれてきた鞠智城の全貌は、ほぼ明らかになつた。したがつて今回から伝鞠智城の名称は、あらためて鞠智城とよぶことにした。

第三次調査は夏場の作物をさける意味で、昭和45年２月12日より同月18日まで、厳寒の候をえらんだ。今回の調査は去る昭和43年３月、ボーリング調査によつて発見した長者山の東麓、宮野の桑畑内に埋没している礎石群の全面的な露出を行なつた。それとともに従来焼米の出土をもつて知られる、長者原の礎石群の露出作業を行なつた。一方長者山地区では、従来いちじるしく繁茂していた竹笹と、クヌギ林の下刈りが行なわれていたため、全面的な測量を行なうことができた。その副産物として、米原部落の共同墓地の東に隣接した林の中から、自然礎石を2.2m の等間隔に４個配置した建物遺構を新たに発見したのは何よりも幸いであつた。



第１図　遺跡位置図

今回の調査も国庫からの補助を受け、熊本県教育委員会が主催するとともに、地元の菊池市と菊鹿町の共催をえた。また今回も前年同様に、九州大学文学部鏡山猛教授の御指導をいただいた。今回の調査組織とメンバーは次の方々である。

熊本女子大学教授	乙益重隆
肥後考古学会長	坂本経堯
鹿本高等学校教諭	隈　昭志
〃	杉村彰一
福岡市文化財主事	三島　格
福岡市文化課嘱託	緒方　勉
熊本県教育研究所員	桑原憲彰
熊本県教育庁社会教育課参事	上野辰男

尚調査の運営については、熊本県教育庁側より社会教育課長高野達雄、同文化係長松田安雄、庶務係長河野宗忠、社会教育主事中村昇、同主事田辺哲也、同主事高浜知完、同主事福田那智子らが連日交代であたつた。また地元の菊池市教育委員会、菊鹿町教育委員会、ならびに米原部落の地主の方々、部落の方々には一方ならぬ御協力をいただいた。とくに鹿本高等学校考古学部の諸君には総力をあげて調査に御協力いただいた。ここに列記して厚く御礼申し上げるものである。

本報告書の作成にあたつては、次の方々に分担執筆いただいた。

Ⅰ	経過概要	(上野辰男)
Ⅱ	長者原礎石群	(三島　格・緒方　勉)
Ⅲ	宮野礎石群	(隈　昭志・杉村彰一・桑原憲彰)
Ⅳ	長者山の遺跡	(乙益重隆・上野辰男)
Ⅴ	小　結	(乙益重隆)

Ⅱ 長者原礎石群

長者原とよばれる、平坦部の桑園から、炭化米が得られその地中に礎石が包蔵されていることは耕作者・村人のみならず研究者の間にもかなり広く知られていた。けれども近年の開田化の波はこの地にも達したことは、緊急調査概報[註1]に記すごとくで・本調査地域においても地主の高木則行氏によると、８箇の礎石を抜いたという。[註2]

本地点については・すでに昭和43年３月10日ボーリングによる試堀[註3]が行なわれ、南北５列・東西３例の、礎石配置をもつ遺構が概ね確認され仮の配置図が作製されていた。本年度は上記の遺構を発掘により確認することを目的として実施された。

調査は、上記の配置図により南北９ｍ東西５ｍの発掘区を設定し、全面掘開を行なつたが、地表下20cm前後で、A—１、A—２、A—３、A—５[註4]の計４箇の礎石上面に達したが、概ねこの深さで土の色に変化を認められた。（図３）変化とは、黒色土と茶褐色粘土の面が、それぞれ不整形のひろがりをもつて、—20cm前後から発掘区全域にわたつて認められることをさし、前者はA列の礎石があると推定されるところにより面的ひろがりをもち、かつ黒色土中には、多量の炭化した米粒を含む。その深さは厚い所で20cm余、薄い所では２—３cm。後者は礎石を抜き取る際にあばかれた土と考えられるが、そのひろがりの中には黒色土が、かすり状に混在する。なお両者の中には、少量ではあるが、灰や黄色を呈する粘土[註5]も混入する。以上を要約すると、かつてこの建物が火災にかかり、木材や収蔵されていた米などが火気を受け炭化し、建物全域面に落下堆積した。後代に至り地表下—20cmでは、耕作時の鍬先に石はかかるので、黒色土の下層にある茶褐色粘土層があばかれ、石が除去された。茶褐色粘土のひろがりの下には礎石は無い。以上の所見は、東西中央断面における所見とも一致する。

つぎの発掘は、日程の制約上発掘区の南半のみの掘り下げにとどめたが、A列のみは礎石の遺存状況が良いので、将来の保存をも考慮にいれA列東側の一部のみを掘開した。

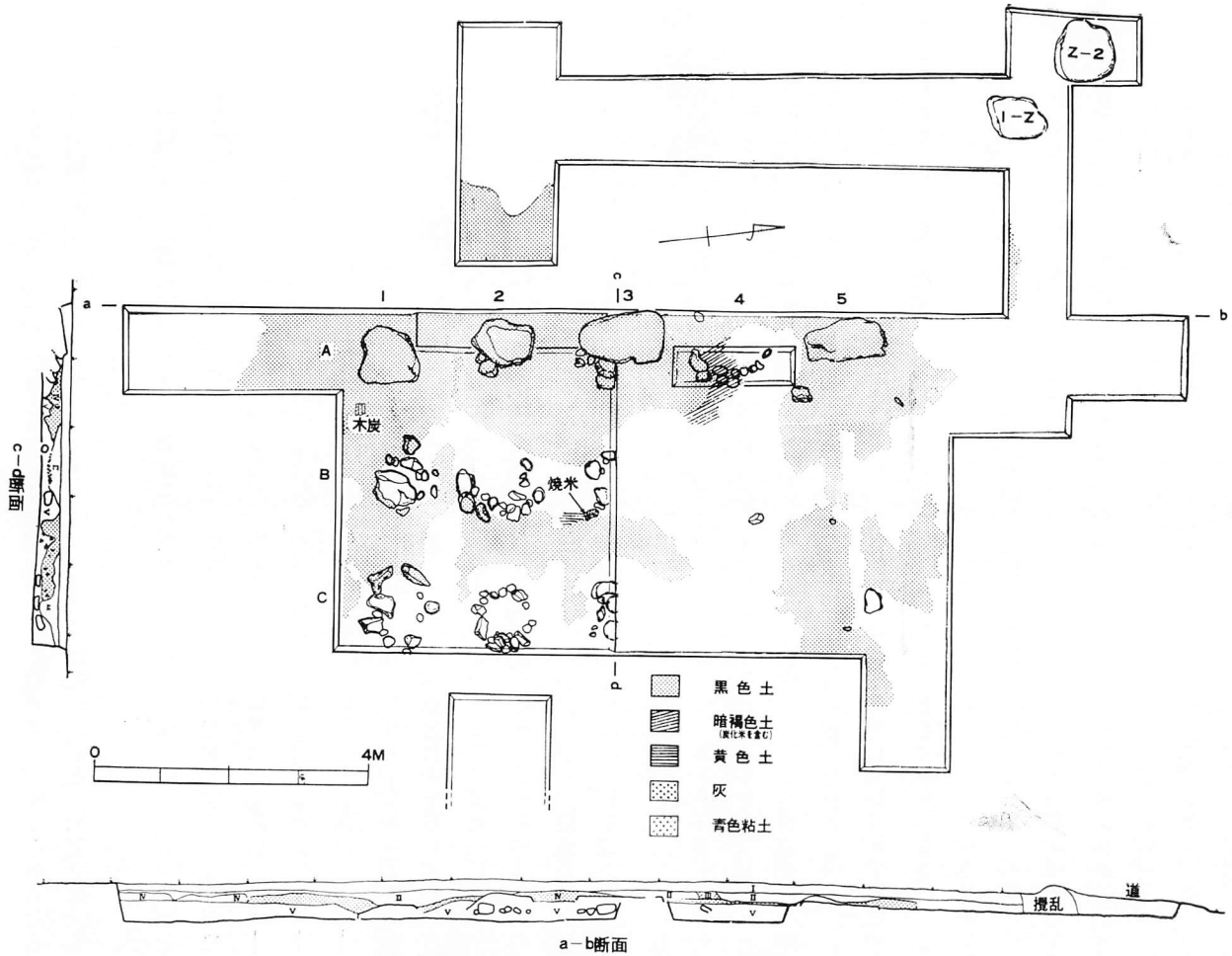
つぎに、断面の観察と各礎石について略記する。

南北断面

発掘区の西側を延長区をも含めて、約13ｍを観察した。既述のごとく20cm前後の耕土（第１層）の下に、褐色土（第２層）があるが、この第２層までブルドーザーが入り、より下位の黒色土層（第Ⅳ層）をもひつかけているので、褐色土と黒色土の双方が混在したブロック（第Ⅲ層）が点在する。礎石の頂部を含めてかなりの深さまでが、第Ⅳ層に属する。根石について付言すると、断面図はA列の投影であるが、A—１は未確認であり、A—２・３・４・５は現存する。点色土のひろがりは北側では、A—５近くまで認められるが、漸次稀薄となる。南側はA—１より南に約３ｍ延びて、漸次稀薄となる。断面からは遺物は検出されない。

発掘区における礎石列

既述のごとく、第Ⅳ層以下の発掘を南半区にのみとどめたが、露出された礎石は、A・B・C列



第2図 長者原礎石実測図

の各１・２・３だけであるが、A列以外は根石のみである。石材は当地方でコメ石と呼ばれる、花崗岩のみに限定されている。（図４）

A—１　長径84cm　短径76cm　頂部に楕円形の平坦面をもつ、前記のごとくこの石のみが他に比べ低い。根石は未確認。

A—２　長径72cm　短径68cm　真下の根石と側面からさしこんだ根石を認める。

A—３　長径124cm　短径64cm　他に比べ大きくかつ平坦面も広い。北東隅の根石は認められないが、もともとないものとも思われる。

A—４　（根石）A—３とA—５の間がこの部分のみ長いので、小試掘坑を入れた結果、半環状にめぐる根石を検出した。

A—５　露出作業時に、既に平坦面が露出した礎石。長径116cm　短径60cm。　A—３と同じく長形で平坦面も広い。

B—１　（根石）10箇の根石がほぼ環状にならぶが、とびぬけて大きい根石が１箇ある。これはのせる礎石の裏の形状に関連するものであろう。長径116cm。

B—２　約16箇の根石が環状にならぶが、西側はかなり抜き取られている。長径124cm。

B—３　中央断面にかかり、全形状をうかがえないが、７箇が環状にならぶ。長径96cm。

C—１　12箇が円坐状にならぶ。長径130cm　短径120cm。

C—２　約21箇が円坐状にならび、C—１とともに根石としては、遺存のよい方である。長径100cm。

C—３　約６箇が認められるが、B—３と同じく未発掘に属する。

中央断面（東西断面）

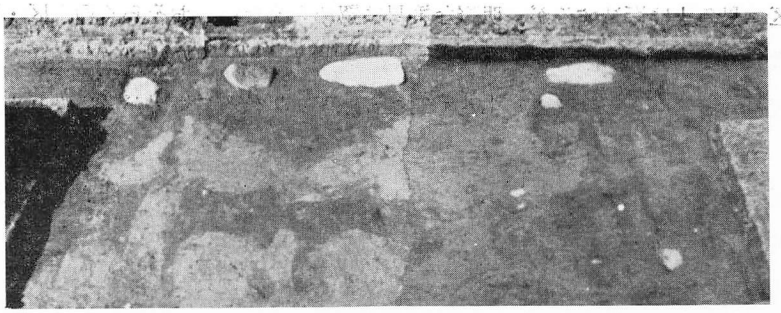
A—３、C—３をきつた東西の断面を示したものであるが、B列C列の礎石を抜いための攪乱土が看取されるが、A列は黒色土につつまれ安定している。

つぎに、礎石の方位と柱間間隔について簡記する。方位はA列において磁北より６度５分西偏する。柱間間隔は不正確であるが、次のごとき数値を得た。

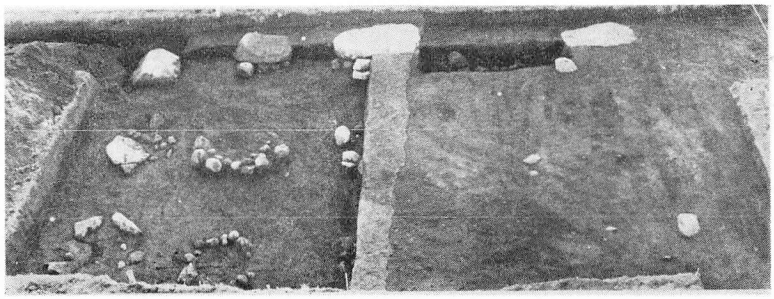
A２—A３	168cm	5.544尺	A２—B２	182cm	6,006尺
A３—A４	162cm	5,346尺	B２—C２	202cm	6,666尺
A４—A５	158cm	5,214尺	A３—B３	202cm	6,666尺

上述の数値において、ほぼ確実に柱間を計測し得たのは、A列のみであり、他は比較的遺存のよい根石を使用したが、不正確である。さらに北半の発掘において良好な礎石を得て、より正確を期したい。

第１次２次の調査で得られた礎石からは、２間４間の建造物となるが、さらに礎石がかつて存在したのか否かを一応考えてみる必要がある。発掘の結果からは、南側については抜き取られたと考えられない。おそらくA—１は角柱であろう。北側には、次のような多少の疑点がある。それはA—５に接する攪乱層は、A—６が抜かれた結果の攪乱と見られる点で、もしそうであつたとすると



第３図　　黒色土と礎石を抜いた跡



第４図　　南半分の礎石

西１区の黒色土はA—６に関連づけられ理解しやすくなる。確証はないが、Z—１，Z—２のいずれかをA—６に比定されもする。西側については発掘の結果から存在し得ないのではないかと思う。東側については、東１区を約３ｍ拡大したが、存在を示唆するような所見はない。但し西側地区は、かつて段落ちとなつて現県道に平行な細長い畠地があつたという記憶が、地主にも確実にあるので、東側のその１列が段畑をひらいた為に破壊されたとも考えるが、いまそれを実証す材料はない。

発掘拡大区

図示のごとく、発掘区を拡大したので、その概況をのべる。

東第１・２試掘区[註6]　前者については特記事項はないが、断面に崖状の段落ちが認められる。後者には黒色土の限界が見られる。

西第１試掘区　黒色土の北限が、本区と北第１区にかけて見られるが、この地点は攪乱がかなり激しいので、黒色面のひろがりは、やや北にのびていたと考えられる。攪乱部には搬出された礎石２箇（Z—１，Z—２）が検出された。礎石下には水道管が通る。

西第２試掘区　黒色土は漸減するが、明瞭な境界は認められない、おそらく西１区・西３区をつらねる線が、本区の東壁下を通るものと思う。

西第３試掘区　礎石A—２より西に約1.4m はなれた所に黒色土の境界が認められる。西限であろう。

南第１試掘区　礎石A—１より南に約1.5m で、黒色の境界が認められ、断面にも検出される。

南第２・３試掘区　遺構・遺物など検出されない。

遺　物

布目瓦小破片・南第１試掘区とC—３近くで出土。

青磁片　南第１試掘区出土。

米・木材片　いずれもまつ黒く炭化している、前述の黒色土の中に前者は含まれる、もみがらのついたものとつかないものがあるが、つかないものが量的に多い。A—１とB—１の中間の南側壁の角近くから、米と木材がかなり多量に出土。米粒の出土状況は、個々の米粒は揃つておらず、塊状で不統一であるので、穂のままで焼けたとはいえない。[註7]

土師質壺　高台付土師質の破片その他の小片が僅かであるが出土。

結　語

今次の調査によつて、多少の疑点はあるにしても、四間二面の建物のプランを明かにし得、かつその建物が火災にあい焼失したことも明かにし得たと思う。焼失のおおまかな時期を示すのは、土師質の土器片であり、以降の遺物は全く含まれない。

従来、長者原一帯から出土する焼け瓦、焼け米などの説明にあたつて、『文徳実録』所収の天安２年（853年）の「菊池城不動倉十一宇火」の記載を引用して、その事実を示す材料であると、通説のようにいわれているが、われわれの調査の結果断定はつつしまなければならないが、その可能性が考えられるようである。ただし不動倉の規模や十一宇という棟数については、われわれの知識は完全でない。不動倉十一宇がはたして長者原とよばれる台地にのみあつたのか否か、疑つてみる必要があり、これらは今後に残された問題である。伴出の木材の樹名、稲の同定などは本報告にゆずりたい。[註8]（三島格・緒方勉）

註１　『昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概報』伝鞠智城跡・三万田遺跡　熊本県教委　昭和44年

註２　近年の開田による抜き取り以外にも、たとえば、長者原のほぼ中央を通る県道拡張工事の際にも、多少の地形変改がなされているが、この変改は礎石配置に重要な関係をもつている。

註３　乙益・田辺・緒方・上野および三島らが担当した。文献は『昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報伝鞠智城跡』昭和43年　熊本県教育委員会。

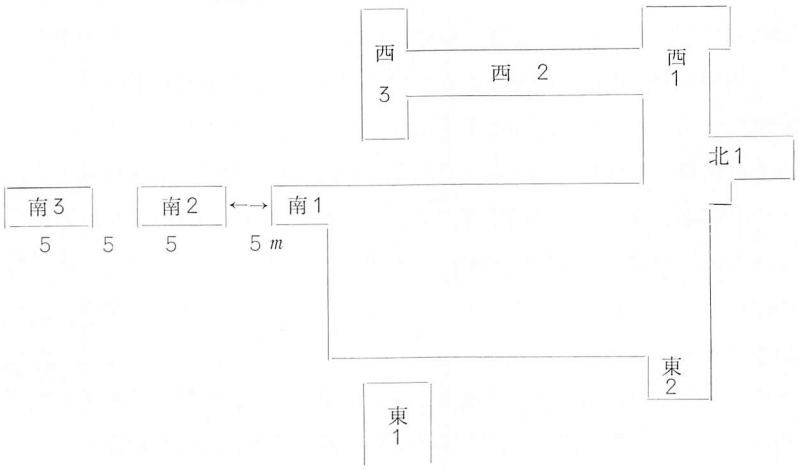
註４　礎石には下記のごとく番号を付した。A—１はA—２、３、５よりやや深い。これはブルド

ーザーによる沈下を思わしめる。

	1	2	3	4	5
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○

註５　この黄色粘土は、宮野礎石における、礎石下の知見により判断すれば、根固め用の粘土の一部と考える。

註６



註７　長者原では、炭化米のほかに粟・稗・小麦などが得られている。（註３書の長者原の項）

註８　昭和31年８月滝川政次郎教授を中心とする菊池古文化調査の折に、三島は米原部落近くで、相当量の炭化米と木材片を検出した。

本実測図のトレースには高木恭二君らの協力を得た。記して感謝申し上げる。

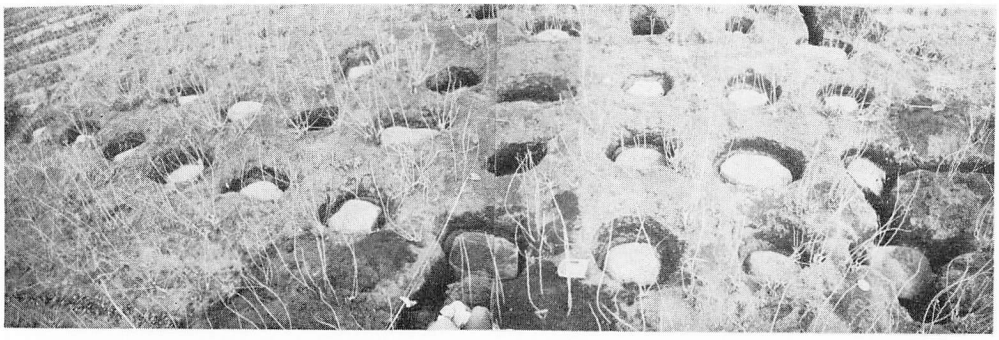
Ⅲ 宮野礎石群

昭和43年３月のボーリング調査で、地表下約30～50cmに、南北に長軸をとる礎石群が埋没していることを確認した。そこで今次の調査はその礎石群を露出して、建造物の規模を明らかにし、この建造物が鞠智城の中でどのような機能をもつていたかを推定するためのものであつた。ただ日程の関係で礎石以外の遺構については調査できなかつた。調査は前回のボーリング調査にもとづいて礎石の周囲だけを露出したが、礎石の下部の調査は１礎石にとどめた。露出した礎石群は西から東へA・B・C・D列、南から北へ１～１０とした。（図６）

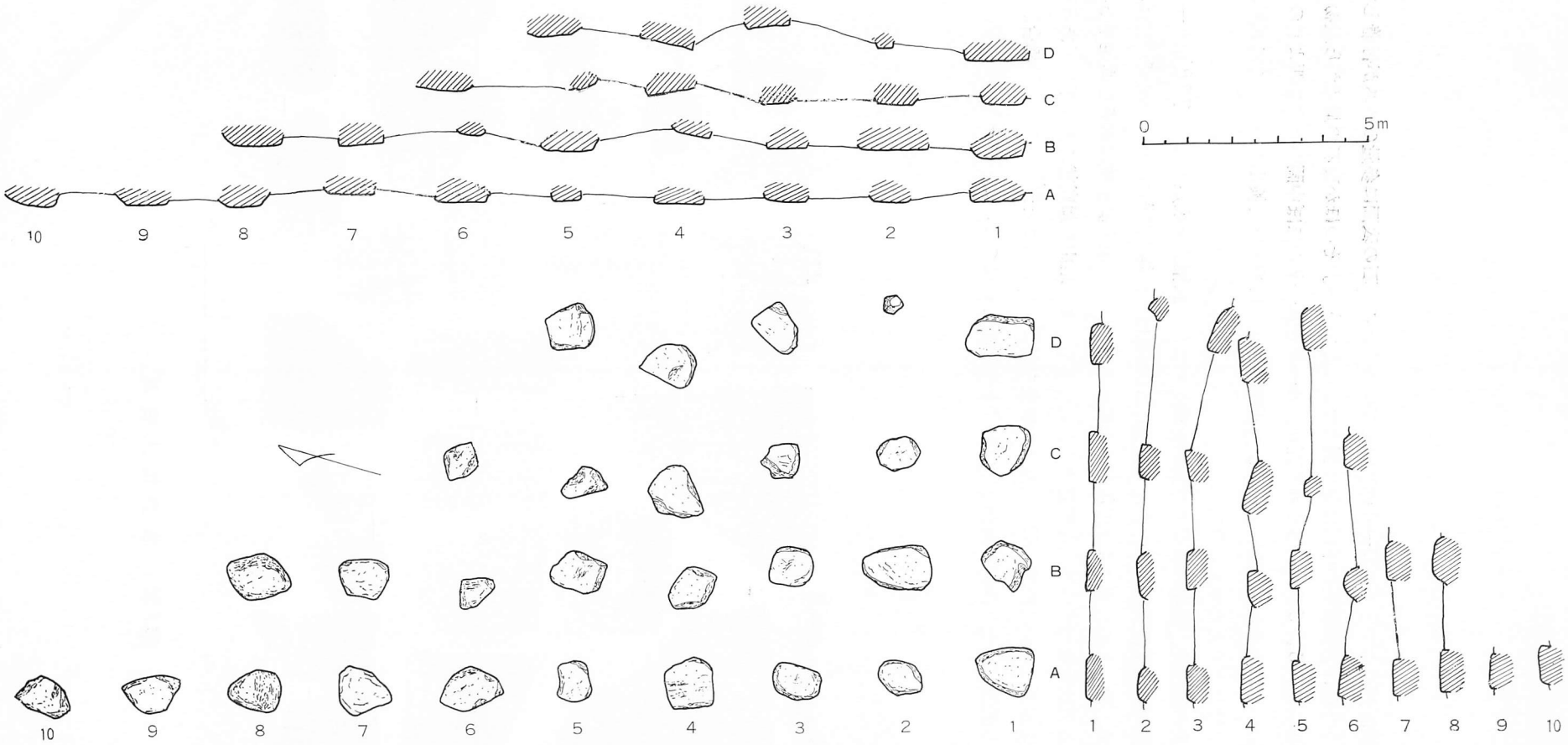
礎石列はA列が10個、B・C・D列はそれぞれ８、６、５個で合計29個を確認した。A—10は現在の桑園の北の端にあたり、その北側は段落ちの畑地になつていて、そこに２個の礎石が存在している。おそらくここの礎石群の中から移動したものであろう。礎石の石材はD—２（硅岩質）をのぞいてすべて花崗岩を使用しており、上面は平坦になるよう加工されている。

29個の礎石のうち原位置から移動したと考えられるものは、B列の４、６・C列の３、４、５・D列の２、３、４の８個で、A列は全部原位置であろう。とくに地形がA—１からD—５方向にかけて低くなつているため、D列は耕作時の邪魔になる関係からD—１以外をかなり深く埋めこんでいる。実際地主の話によると、D—１は表土下わずか12～13cmであつたので、耕作するたびに邪魔になつていたということである。

原位置にあると考えられる礎石間の中心距離は東西、南北ともに約2.41～２m（＝８尺）である。したがつて東西約7.20～30m（礎石端から礎石端までの距離8.35m）、南北約21.60～70m（同22.70m）の長さになる。つまり現状では間口３間、奥行９間の建造物を想定するのが妥当であろう。なおこの建造物の性格については別項にゆずることにする。



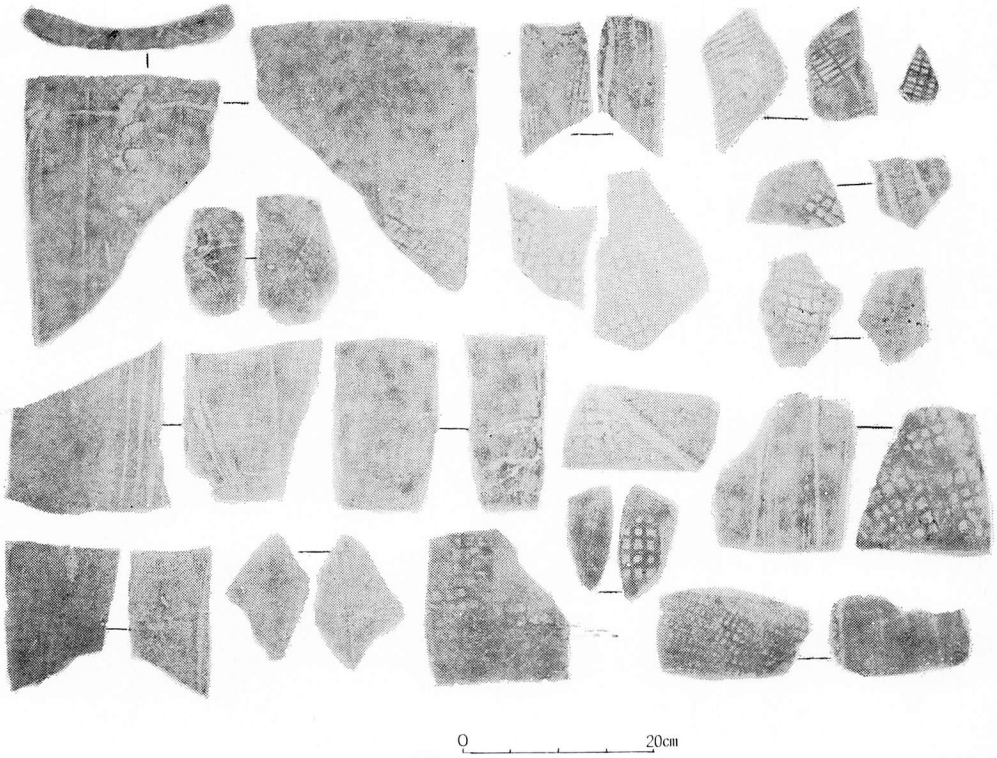
第５図　宮野礎石群



第6図　宮野礎石群配置図

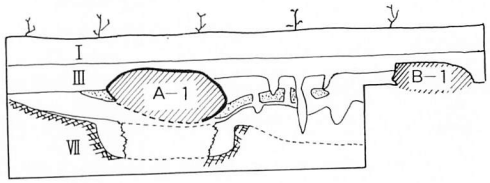
この礎石列の中でとくにD—4は移動しているうえに、石の表面に多量のススが付着している。このような例は宮野礎石の中には他に例のないことである。そのほか礎石の周辺から遺物を検出したのはA—2、3、5、C—3で布目瓦片、A—8とA—9のほぼ中間からやや西よりのところから平瓦のかなり大きな破片を、A—1から土師片をから椀型土器を検出した。とくに瓦類は二次的な火をうけたとみえ赤味をおびている。

礎石群の露出後、版築の広がりや遺構を確かめるため試掘坑を設定した。（図8）A—1を東西南北に掘つた第Ⅰ試掘坑、B—1から南方に3.5m延ばした第Ⅱ試掘坑、A—4から西方6.5mの第Ⅰ試掘坑、D—1から東に4mの第Ⅳ試掘坑がそれである。第Ⅰ試掘坑は礎石を固定する場合にどのような方法を取つているかを確認するためである。まず地山を鍋底状に掘り下げてある程度固め礎石を安定させたために約30～40cmの厚さで版築を行なつていることがわかる。この場合建造物の外側になる部分、つまり西側と南側とにはわずかな版築を行なつているにすぎない。版築は地山の赤

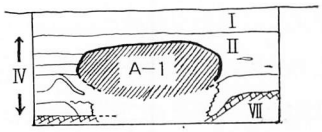


第7図　宮野出土古瓦

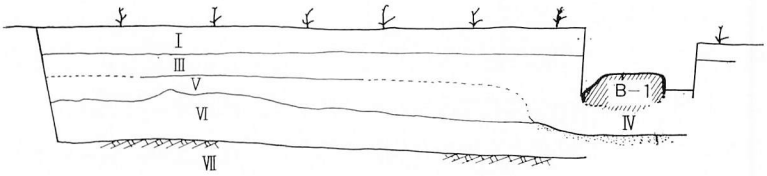
Ⅰ 試掘抗(西－東断面)



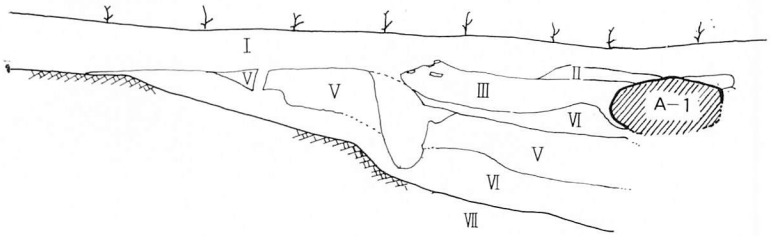
(北－南断面)



Ⅱ 試掘抗(南北断面)

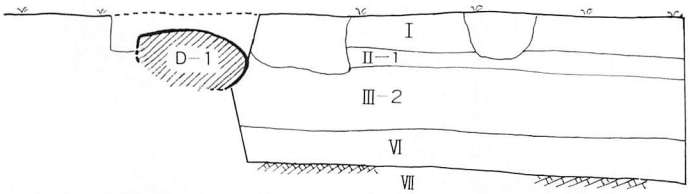


Ⅲ 試掘抗(西東断面)



Ⅰ－表　土
Ⅱ－栗色土
Ⅲ－砂質土(花崗岩)
Ⅳ－盤　築
Ⅴ－黄　土
Ⅵ－黒色土
Ⅵ－地山(赤土)

Ⅳ 試掘抗(西－東断面)



0　　4m

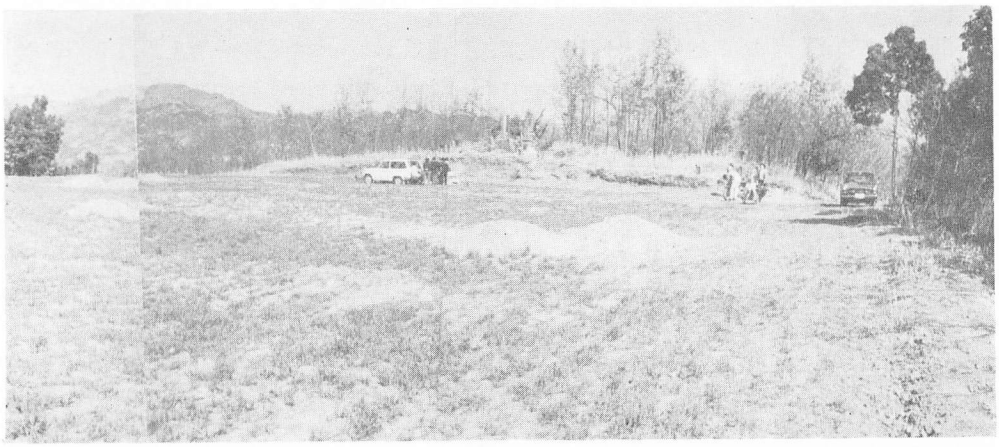
第８図　宮野礎石土層断面図

土や黒色土を交互に固めたもので、スコップでもかなり手こずるくらいに固めている。なお礎石下に根固め石も使用していないことも特色であろう。第Ⅱ試掘坑も版築の広がりを確かめるためのものである。ここでは地山が深いので地山の上層の黒色土層に黄色がかつた版築を行なつている。第Ⅰ試掘坑の状態と同じように建造物の外側にはわずかに約40cmの版築の広がりを認めるだけである。第Ⅳ試掘坑では版築の外側への広がりはまつたく認められない。建造物の西側の遺構を調べるための第Ⅲ試掘坑では礎石の外側に約1.70mの広がりをもつ黒色土層（地表下約60cm）を確認した。この地層は地山上の黒色土の二次堆積層と考えられる。またその上面がやや固いことから、当時の地表の一部ではないかと推測する。なお図中で地山が西側で平坦になつている部分があるが、これは近年ブルドーザーによつて削平されたためである。また礎石の外側約1.50～1.80mのところ、深さ約30cmで平瓦片を多数検出した。（図７）

宮野礎石列の全般的な特徴として、礎石の下部をある程度固めたことはもちろんであるが、建造物の内側になる部分は、礎石の上端から約10cmの深さで非常に固めており、建造物の外側はほとんど手を加えていないことを指摘できる。また版築の上面に花崗岩の風化した砂質土が、約２cm～８cmの厚さで存在する部分がある。この砂質土は版築後おそらく建造物の西側から流入した堆積物であると考える。

（隈　昭志、杉村彰一、桑原憲彰）

Ⅳ 長者山の遺構



第9図　長者山

長者山は米原部落の南西約500mにある小丘で、長者原台地の西端を限る要害の地である。この小丘は北につづき、灰塚・涼みの御所の土塁線を経て佐官どんの峯につながり、一連の小山脈をなす。この地には昔から米原長者どんの「御金蔵」があつたという伝説がある。おそらく現在地表に露出している礎石群からおこつた伝説であろう。

現地は鹿本郡菊鹿町大字米原字長者原530番地にあたり、丘全体は雑木とクヌギ林におおわれている。丘の大部分は米原部落の共同墓地になつているため、頂部の変形いちじるしい。この地に礎石列があることは早くから知られており、熊本県が「伝鞠智城跡」として指定したのもこの地であつた。しかるに墓地の周辺は竹笹や雑木が生い繁り全貌を確かめることは容易ならぬものがあつた。たまたま今回は米原部落の人たちによつて、樹林の下刈りが行なわれていたため、全山の地形測量を完遂するとともに、新しい礎石群を発見し、多大の収穫をあげることができた。（図10）

長者山は宮野礎石群の所在地から約60メートルはなれたゆるやかな丘で、宮野の礎石群との比高差約10メートルを有する。丘頂は数段に分割された平たん部が構成され、米原部落の共同墓地になつている。従来、礎石群の判明していたのは、共同墓地の北側に接したクヌギ林の中の平坦部地点で、南北2列、東西4列、合計7個におよぶ。これらのうち、東西の礎石間隔は7尺の柱間が想定され、南北は7尺5寸の柱間が復元される。このような1間3面の建物はありえないので、おそらく礎石列の北側か南側にもう1列分の礎石があつたと考えられるが、確認されていない。おそらく抜きとられたのであろう。この地点に礎石列のあることは古くから知られており、かつて昭和30年8月、神道文化会と菊池文化顕彰会が共催して調査したさいには古瓦の残欠や須恵器の小破片が検

出されている。

共同墓地内の礎石群は合計10個以上に及び中には移動していないものもあるが、多くは埋葬のさい、動かされ、不均等な配置をもつて散在する。これだけの礎石群をもつて幾棟分の建物を復元できるか問題であるが、少なくとも現状から考えて、二棟以上はあつたものと考えられる。さらに、墓地の東側のクヌギ林の茂みから今回新たに発見した4個の礎石列は、柱間間隔7尺が復元され、おそらくこの地点から墓域の平坦部にかけて1棟分の建物があつたことが考えられる。

又、墓地の北西側の段落ちになった山林中の平坦部に南北方向に2.2m間隔で3個の礎石があり、その西に2個の石がみられる。まだ埋没しているものも予想され、ここにも1棟の建物が予想される。

次に、共同墓地の西側では、昭和43年正月、何らの予告もなくブルドーザー開墾が実施され、多くの礎石群が消滅した。後日、聞くところによると、開墾された平坦部には等間隔をもつて7個の礎石列があつたといわれる。おそらくこの平坦部には、1棟以上の建物があつたと考えられるが、今は探索のしようがない。墓地の西端には、現在移動していない礎石1個と移動した礎石2個が認められるが、おそらくこの地点にも1棟分の建物があつたのであろう。現在、開墾されてしまつた長者山西側の平坦部では、西北方の谷と東南方の谷に合計3個の礎石が転落している。又長者山の南、比高約20メートル下がつた地点には平坦な土地があり、あるいはこの地点にも何らかの建物遺構が存在するかもしれないが、今回の調査では確認することができなかつた。

要するに長者山の礎石群は、地形的にみて鞠智城内でも重要な施設があつたものと考えられる。すなわち、北は、灰塚、涼みの御所、佐官どんの尾根につながる土塁線をひかえ、東は宮野礎石群及び長者原礎石群に接し、西は池ノ尾城門礎石をのぞみ、南は深迫城門礎石及び堀切の域門礎石を見下ろす展望のよい地点にあたり、軍事的意義は大きい。しかも長者山の建物は瓦葺であつたと考えられ、従来、数片の古瓦が採取されている。

（乙益重隆・上野辰男）

第10図　長 者 山 地 形 図

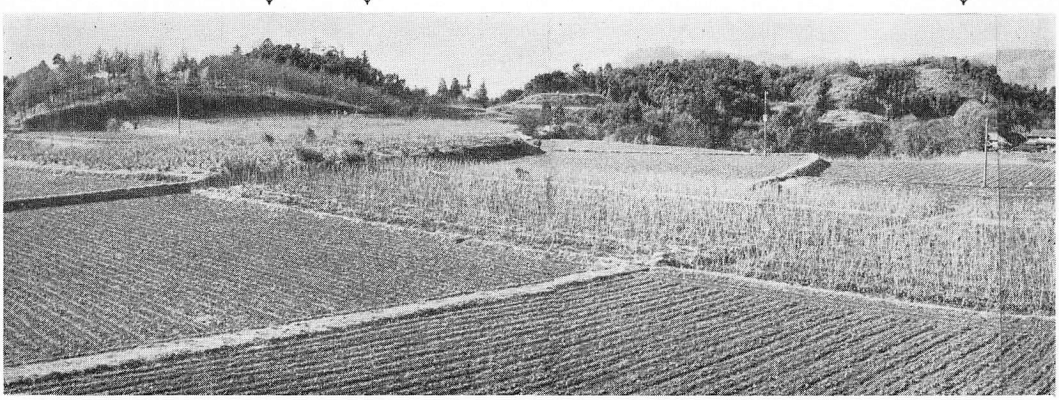
V 小　　結

以上のべた通り鞠智域は、昭和42年度の第一次調査に着手以来、第二次調査（昭和43年度）を経て本年度の第三次調査を終るにあたり、従来判らなかつた多くの問題を解決することができたことは、何よりも有意義であつた。

すなわち第一次調査時には、鞠智域の外郭線を一応把握するとともに、米原部落およびその周辺に散在する礎石群を記録し、長者原一帯の測量調査を行ない、基礎的な作業を概成した。さらに「堀切」と「深迫」・「池ノ尾」に現存する城門礎石を完掘露出し、城の全体配置を探索する有力な手がかりをえた。一方米原部落の西を限る小山脈に設けられた土塁線をたどり、「佐官どん」の、尾根にある平坦部の発掘を行なつた。また従来実態の明らかでなかつた「馬こかし」の石垣や、「三枝」の石垣はたとえ後世の所産とはいえ、鞠智域の配置を知る有力な手がかりとなつた。とくに同年３月に行なわれた補充調査によつて、「宮野」と「長者原」に礎石群が埋没していることが明かになり、第三次調査の端緒となつた。

第二次調査は主として「深迫」の域門礎石一帯に進入道路の方向を把握するとともに、周辺に土塁遺構らしきものを発見した。とくに第二次には土塁線や切落しの崖線をたどり、その実測図を作成することに重点をおいたが、「長者山」から「灰塚」「涼みの御所」「佐官どん」の尾根にいたる土塁線、および車路のほか明確に把握できるものはなかつた。それというのも米原地方は花崗岩の風化土地帯であるため、崖線の自然崩壊箇所が多く、人為的遺構との区別があまりにも困難であつたからである。

第三次調査はすでにのべた通り「長者山礎石群」および「宮野礎石群」「長者原礎石群」に重点を



第11図　米原台地全景

おき、礎石列の全面露出作業を行なつた。「長者山」地区では今回新たに発見した礎石列も合計して、約1000平方メートルの中に、５～６棟分の建物が想定された。とくに従来判つていた墓地の北側にならぶ礎石列は、南北７尺、東西７尺５寸の柱間間隔が復原された。このような礎石配置は従来類をみないので、さらに今後の探索が必要である。また「宮野」の礎石群では東西４列、南北10列分の礎石列が確認され、柱間東西は8.5尺、南北８尺の間隔を有することが判つた。おそらくこのような九間三面の建物配置から考えると、長倉の跡と考えられ、三間四方を単位ととする東倉・中倉・西倉の三倉が一棟内に在つたものと推定される。

さらに「長者原」の礎石群は東西6.5尺、南北5.5尺の柱間間隔が復原され、礎石は東西３個、南北５個分だけしか確認できなかつた。少くともこのような礎石配置の建物は他に類がなく、柱間間隔も他の礎石とはまるでちがつた数値をえた。一体鞠智城では、各礎石群によつて柱間間隔を異にするのは、いかなる理由によるものであろうか。或は各建物の機能が本質的に異なるのであろうか。また各建物の成立年代がちがうのであろうか。いずれにしても大きな問題が残る。

このように鞠智城は従来幻の城跡とよばれていたが、ここにようやく全体の概念だけでも明らかにすることができたのはまことに幸である。しかし、まだ多くの問題が残されている。すなわち城の全域には「少監どん」「紀屋敷」をはじめ「長者山」の南平坦部、「堀切」の門礎石の上段にある古瓦出土地点、「長者原」における埋没礎石群、その他域の外郭線と内郭線の把握など、疑問点が少なくない。今後といえども鞠智域は、抜本的な継続調査を行なうことがのぞまれるものである。

（乙益重隆）

城北学校
道場
三反田橋
木ノ山
松尾
大林
術田
竜徳
西大寺
本分
松尾神社
木野
城北中学校
宇田原
初田
牛こかし
大水門?
佐官どん
涼御所
矢倉
木原
岩くら
紀屋敷
少監どん
宮野
長者原
長者山
水樋
池ノ尾門礎石
馬こかし
切堀
堀切門礎石
木野神社
三枝
深迫門礎石
馬責め堤
鍾掛松
上古閑
稗方
一寸根
黒蛭
初田橋
合
0 100 500 1000m
礎石列建物遺構想定地
門礎石
外固、土塁線

第12図　遺跡図

昭和44年度埋蔵文化財緊急調査概報

昭和45年3月

発行所　熊本県教育委員会
熊本市出水町今915

印刷所　有限会社　石田印刷所
熊本市平田町486

7

この電子書籍は、昭和 44 年度埋蔵文化財緊急調査概報を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：昭和 44 年度埋蔵文化財緊急調査概報：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：　096-383-1111

URL：https://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:2024 年 9 月5日